





門 凡 3
號 3328
卷 1

讀鎖國論

國可鎖乎。則不可通其用而易其物也。國不可鎖乎。則不可閱其物而守其疆也。一啓一閉者。治國之要也。古者遣唐之使。留學之生。禮樂文物。以華吾國。室町安土。不學無識。或以僧為使。稱臣明國。或以蠻為敵。將變國風。豐臣氏起。攘其巨魁。一掃腥風。及東都起。晉從殲焉。奮染汗俗。天地一新。於是乎。其鎮益固。其國益治。民不貴異物。而賤用物也。唯是清蘭二國。無歲進卷。

無心當
作每



昭和廿三年
九月廿五日
購

苟易有無耳。極西檢夫爾往來斯土能記
國事能知國情譯司志筑氏讀其書能解
其語譯為二卷更名鎖國論使人知極西
有斯書不亦偉乎。吾嘗讀明人日本風
土記及韓人海東諸國記諸書嘆異域之
人而能通吾國之事情矣。生斯土也食斯
祿也。徒眩異物而遺用物因循苟且唯利
是謀者不亦可耻之大者乎。後之君子一
讀斯書則其於憂國萬分之一庶乎免乎
素餐之誚矣。云爾。杏花園主人書于瓊浦客舍。

鎖國論譯例

- 一 是書を西域の人エンケルトケンフルカ往年
我國に海へ見せしむるを採りて著したる
日本志の中はて勅書ともしりしむるを今
特に摘出して、拙著等とりて翻しつる
りのゆゑ、日本志を彼方乃、治して、ヘシケ
イヒンキハシヤワパンといふ書なり。
- 一 書中あり、檢夫爾々自注あり、彼方にて是
種文あり、注を書の間に一字に記すの如く、前後
に書月の形をとり、其中間に記せし、け方にてハ

二行に書す。如く、今は予が注と混雜せん
事と恐る。故に其首を云ふ。檢夫爾自注曰の
六字をその類いのりなり。

一 書中に云、對句乃如きりのなり、是は詩文の
類いすれども、彼方に云、七をなんとの事なる
に、何す、只一言乃數たよくおぼしむとみて
助詞の類ありて、一二を流域して、照意とあり
む、何と云、意よ、彼方にて、山詩に韻脚られ
ども、今是書に如く、は、河、河、類いなる由、
韻脚を思はず。

一 彼國の字は音の如く、て、我の國字の如く、
あり、我國の人名地名皆、音とつて記
せり、今是書中地名人名の如く、を記す、
む、本字をとりつて、おの、國字をとりつて、
其故は、蒙字は音にて、キヨモリ、ヨシ子、サツマ、ヒセ、
なん、せり、おは、多、路、お、これ、清盛、義經、薩摩、肥前、
な、れば、由、に、お、字、と、り、つ、て、記、せ、を、清、お、使、ら、ん、
か、る、ち、り、、、又、日、本、一、字、の、義、と、別、一、義、
二、ワ、ホ、レ、は、日、乃、基、お、と、り、ん、が、め、と、記、せ、ら、
め、と、は、り、、、日、本、を、日、の、基、お、と、り、ん、が

一、二、誤

如くして記する時は、日本二字重複するが故
に、四字とりつてニッポンと記せらるゝのなり。
但し日の基本を、系文に、コロコストスナリ
ハレテクンとあり、其酒をサケといふを記せるは
其酒を濁といふと醜く醜く酒を系文に
ヒールといふればとて其ヒールを酒といふを
醜すれば、ヒールの邊に對訳なくあり又四字
を用ひてサケといふを記せり。又地名
ホレゴとありて、倭と豊ともありぬ
勢あり、是も系文のちりに四字にて記せり又

- 右よりいへばサケも実はサツキと記せり。これ又
系文の記に似たり。
- 一帯の文を、平假名を用ひ、葉音は片假名を
用ひ、希と記せらるゝがむ。
- 一是書元來を、撰四編といふは、題も好く、上
下を、乃列も、すも、おのれ、がに
あけたるなり。
- 一此書を、漢人はも、世界の四州の一帯といふを、
初と、別も、皇國、支那、唐、印度、天竺、韓朝、
伯爾、察亞、細亞、洲の中なり、魯、西亞

今云赤人の本國、都爾格の都城、熱爾馬泥亜國
トルコ セイル マニ ニ バ カ カ ル
ホ ホ ル カ ル カ ル カ ル カ ル カ ル
 波爾杜毛爾國、和蘭國等々、歐羅巴洲の中
フランス エウロパ
 ちり、歐羅巴き、亞細亞の西北にあり、歐羅巴
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 乃南に亞弗利加洲あり、涉地、莫羅格國
モ モ モ モ モ モ モ モ モ モ モ モ モ モ
 莫訥木大波亞國等あり、歐羅巴より西へ
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 ありて、亞墨利加洲あり、涉地、多くは歐羅巴
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 人乃あり押領せしめ、亞墨利加を我國
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 よりしを却る東へ行く地球運命ありあり
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 あり、又み帯を天の赤地乃り、地の赤道
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
 とし、その南を極とす、地乃南を極とす、赤

及び二極に切りて各九十度として、赤道を
 距りて南を各二十度、赤道より北を各二十度、赤道を
 暖帯とす、二極を距りて各二十度、赤道を
 とす、赤道より北を各二十度、赤道を
 赤道の中より、一暖帯、二赤道、赤道の中より、
 我國を北緯、赤道を南緯、薩摩の海を赤道、
 赤道より北を各二十度、赤道を
 赤道の中より、一暖帯、二赤道、赤道の中より、

作聖之歳烏來既生魄

鎖國論上

極西 檢夫爾著

今の日本乃人々全國を鎖して國民として國中
國外に限らす。稱る異域乃人と通商せざらんむ。
事、實に所益ありにや。吾邦痛

禁め地球をわくわくせし。殊にわたりる世をわたりのよし。今又
それが中において。文を別とせし。事とせし。事とせし。好ま
ば、石をちりん事を。淺者多くも。云及なりとせん。固好
通文の道と人。乃巨くや。吾邦の事と今や
うねを破る。事と好まは。吾邦の事と今や
好すに等しとせん。凡造物の生する。亦乃りの孰

同ノ誤カ
固ニテモ固シ

同類聚會通交するを遊せざる。さればその如に
 智て、彌滿と立人ののは、冥に造物者と蔑視す。
 そのなり。世奉て唯一の目掃と見え、唯一乃地面を
 臨て、海とも同。乃年々呼吸せり。吾地乃
 我爲に後保不乃、第交造物の我と与つる。而法
 法則一つとして、通交階生の乃に同系せずと
 り、事おし。人生れて、鸚燕にたも。若らさらんや
 は、言は人として、おの鸚燕乃皆り。其りの天の妙妙用
異域に律をす。其のさうんや。 自らとを付せられて、我、鸚、燕、中に在て、至るたは
神魂とりつて、形體と一和せざる。ありつとや
カク

せん 言は 神形 全く 核列 の ん は い を 形體 と 離 れ て 今 形體 と して
せん 神 魂 の と り 造 業 と 均 る 理 の ゆ め に 形體 と 離 れ て 今 形體 と して
 眼に一回乃中に因圓せしめて、それと神魂とを一つと
 何れも殊邦異域乃可觀、悟、樂に樂らむ。いづれを
 愚まは可なりんや。いづれの星も星と星の道のその際ふ
 をてうれが、おふちの競ふかぬ。
言は 法 星 は あ ら う の 因 圓 と して
と ま ら ん の 一 と り 其 の 若 多 く を 信 せ ず して 法 星 乃 體 を
 くして、胎れり。其の胎乃境外を胎す。物は
 是より、各一世思にして、稀く乃有情なり。胎生の乃
 しく、天、恩と信作す。其の道をも、胎らんとその
 ありて、信、胎とす。其の胎は地球世思乃

未生の所あり是等の所生は既く宇宙に充滿せる
りの所ありヨフ古人の語に欲乃身人に入らざる
海はけ理と云ふ所ありあるははれ乃人由
巷学陋習水小蓋と脱出して敢て大雄偉
高山乃見と云ふとおととて造物乃慈悲智恵
乃空新ちりてを法としてつて空を一切の
何事なりこれ星體乃天上より降りては
徳大域乃地上に降りて如く御々に天際深
大深高き言を以て中旨に満ちればその
世界彼是互ひて造り出す事能はず既にけ乃

如く不惑乃世界をりつて観れば法世界に在らん
衆生も彼世帯異種異性殊状殊所ありん事皆
これ変異し如く如く如く理なり是編衆生の
法と云ふに堪へり如く如く如く理なり及理の
さへ適ひたるをりつてそれと云ふは彼に達して
観るに今如の獨言至智乃造物者乃同姓同根の
所のとりつて造るも一たる衆生にして善くはりの
味善くはけ味乃世界と云ふに一切同く如く
らん其のは造る一城の肉も同根せる氏の如く
さらばうらうらう相親睦しうらうらう事如く

物より魚し乃至その及に居りその事と破らんりの
河より富上の罪科たらん事其理ありテラツカラ自分明白
あり物又別を我地球とつる造物者これを役け人
氏の位ありし物慧と愚愚とをりつて又よく結ぶ
造営して人氏とてあつて皆おたへして
一體物魚ららむ國土の事ありと法るその意する
所種く乃系本有り種く乃會歎有り種く乃合
石有り天下富上の親樂の地とつてあつて皆
万端その別有り体へて是是すそのはちその
ほそあり

此有銃 禾 稼 彼有 美 蒲 萄 印 度 出 象 牙
沙 巴 産 名 香 沙巴地名

これは人偏互ひり援助する所切用のその是れと
通好同好乃要搥ありりの有り物ハ今乃日本人
が目前にこの天運と破廢一顯露にての人心を種
海一ありに天の終する所乃同好法別人者一日も
何くもをりとのとこありめきは如何で西理小
適へりしゆゆでる選に中らすとせん既りその國中
と禁ありて其國の人と通高通路するものと意し乃
至入ませんと欲するものければ強く拒してをさけ

人境因に於て、恰も獄囚乃れ如し。暴風法災乃
爲り吾國の浦に漂着しけんりのをさへ小矣邦を
見しとたふすはき、生涯これと固固に囚ふ事、捕
逝乃ちのを捕へちまらぬし、ふらふ好んで、却ちをさし
その所是は、若くは國を所是なりとて、曲るんぬら
は海舟乃ちとて、歎んと驚し、曲るんぬら、切あきと
樂科に如し、吾國の人、不幸にして、暴風破船の災
に、あつて、この浦に漂着す、その所は、まらぬ捕へて
獄に投す、然るに、のめきは、是の造舟の制、如し
天の法別、然るに、樹立せらる、そのと、破滅す、に

あらずし、何ぞや、たも、復國、事、長程、なるに、似る。
事をいへ、諸星、名、一、世、史、なり、と、す、る、事、は、これ
元來、厄日、多、個人、の、と、し、めて、後、附、せ、し、ま、に、し、て、後、世
天、學、家、多、く、ち、は、流、に、帰、依、す、と、れ、を、先、ち、太陽、と、恒星
と、と、一、種、と、し、回、ト、い、ふ、所、動、あり、と、し、地球、と、い、ふ、事、と
と、位、と、し、と、し、に、太陽、の、初、と、繞、と、し、て、天、星、の、軌、道、
皆、各、一、一、世、史、なり、と、す、る、事、の、あり、事、曲、の、ま、は、天、字
法、書、に、見、入、て、予、が、譯、せ、し、も、何、れ、と、い、ふ、は、畧、し、つ
ゆ、と、た、乃、中、有、に、入、ら、る、四、句、の、文、を、系、文、に、羅、旬、結、
と、り、つ、て、記、せ、り、所、乃、二、句、は、古、詩、人、ヒルキリユス

か終りにおつけまゝと見たり今ステイルド人が
羅甸書によりて終に大意を魏へおつたか如く
なれども、東文他を折抄するの如くしては、予が書
乃ち考へるにあり、沙巴は彼亞臘皮亞の
中に行り

右は所は天下と一體同好との云々と欲するは
編^{カタタ}彼方強と法家普遍の言たり、檢夫雨次の
所より云んがあり、先を廢くこれと奉るは、此乃
は、檢夫雨が獨斷の編あり、自ら
自説の如し

今我は、淺編に感んと欲する、日本人が、西の
國法によりて、曉益する、多なるが、西にありて
終くせざる、中終くざる、不然、實理は、西を、既に
知らず、智生の、善見の、事とす、及び、つれば、恐らく
そ法家、各目の、毎説、難讀、難解、多なり、とて、之を、そ
皆も、人々の、忘に、おつす、物なり、とつて、之を、終くは、皆
らく、誤説、と、しりて、終て、我を、論ず、事と、止りて、誠に
に我、終く、せん、事と、許して、よ我、國より、理、を、可
不得、し、不然、多なり、とりて、之を、終けて、終す、らく
今我、地球、乃面、に、在り、とり、終く、異の、説

異習乃法俗をりつてすまゝ造化の要智妙用
 おひて、洋のありまの好くたぐを一面の地りつて
 唯一一移乃氏を容へるのまゝあらずして種々
 許多の俗をよりて一宜き時は禁めあらずその
 域内におひて、河行り海行り、連山乃周繞せりつて
 本地の豊と好せり、とらる。各所あり奇特りの造物
 をとりつて、各俗をりて、各方に居候して、各自自得
 すべくしむるものありとらん、且天院に罷百兩乃
 言語文系礼忠くまのまゝはりつて、おの儀、亦りて、同軌
 一體よりり、人民とて、も密交同好と破りて

従来難敷くして、各處をりて、各地と伝ふとす、
 至る所のものは、甚其の好く、おの儀の好くしむる
 りつて、確平たる好験とあせり、はりつて、すや、
 もめて、人民の根生つ此れを、かへに、傳ふる各方に
 おひて、漸く一體とありて、一島の國とあり、あいは
 回好合一の國とあり、自然に回好するもの相
 親しく、隣國の音、遠とあり、のまゝ、傳へはる、
 姫チキのり、王國を王の國あり、回好合一の法、亦り、おれと、合根して、
 一島のまゝとす、とて、長の新有、おれり、あり、す
 是故に、今よの人民乃、急傳と傳むるもの、天然の對恵と
 誠て、おもひ、そのありと、唐よりあせり、すれば、その地、

おのり^{コナタ}勝方の張強と平らげ^{コナタ}彼方の強助と流るに
遭^{イロマ}りしる所を以て内乳外冠の後^{コナタ}起りて却る
本國^{ソクバク}若干の地を失ふる毎^{コナタ}御^{コナタ}又同好合の
國は強大なるものはその長上^{コナタ}に事するに法俗
爲合れ力とりてすま^{コナタ}りてかゆに魔の法も
政法各別にして平生互ひの精志の心を懐け^{コナタ}是
とりて強大なるものは没落に及ぶ事却る速^{コナタ}
かり^{コナタ}造化の^{コナタ}各地にあらむに一切有用の具とりて
せ^{コナタ}満^{コナタ}り^{コナタ}の領民を^{コナタ}境域の内^{コナタ}満^{コナタ}り^{コナタ}て^{コナタ}
斗り^{コナタ}の地人固有^{コナタ}の地を^{コナタ}祀す^{コナタ}を^{コナタ}す^{コナタ}す^{コナタ}の^{コナタ}政^{コナタ}

り^{コナタ}へ^{コナタ}く^{コナタ}た^{コナタ}げ^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}は^{コナタ}史冊^{コナタ}に^{コナタ}の^{コナタ}御^{コナタ}く^{コナタ}痛^{コナタ}ま^{コナタ}り^{コナタ}
位^{コナタ}過^{コナタ}は^{コナタ}は^{コナタ}あ^{コナタ}れ^{コナタ}る^{コナタ}落^{コナタ}去^{コナタ}る^{コナタ}の^{コナタ}ま^{コナタ}は^{コナタ}充^{コナタ}満^{コナタ}
事^{コナタ}は^{コナタ}あ^{コナタ}ら^{コナタ}は^{コナタ}相^{コナタ}教^{コナタ}害^{コナタ}。捨^{コナタ}採^{コナタ}。全^{コナタ}國^{コナタ}を^{コナタ}精
り^{コナタ}て^{コナタ}荒^{コナタ}原^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}境^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
高^{コナタ}敷^{コナタ}寺^{コナタ}親^{コナタ}と^{コナタ}稱^{コナタ}り^{コナタ}て^{コナタ}厭^{コナタ}於^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
其^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
仁^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
好^{コナタ}く^{コナタ}て^{コナタ}其^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
當^{コナタ}り^{コナタ}て^{コナタ}其^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}
聖^{コナタ}人^{コナタ}に^{コナタ}し^{コナタ}て^{コナタ}進^{コナタ}ん^{コナタ}て^{コナタ}吾^{コナタ}道^{コナタ}と^{コナタ}稱^{コナタ}り^{コナタ}て^{コナタ}其^{コナタ}の^{コナタ}如^{コナタ}く^{コナタ}

諸物と我衣とをいへ我衣とあるんが、
は我、莊健と保ち、又は莊健に後せしめんが、
是等と我衣乃其國人に求む、
物とは今あり、
すうに完良の徳を以てして、
用つのは、
おろして、
かめきは、
と、
して、
又、
乃、
外、
入、
冠、
の、
多、
ふ

り、
ぬ、
の、
か、
言、
り、
國、
い、
其、
に

巴能百爾と巴毗焉國に罷百爾基とて名を置き
あのみを臺りりし今は破壊して只山乃如く
見ゆとてく大古ノアツとて人のとき天下
大洪水ありて万民こゝろは満して唯ハノアツ
が一臺ありその臺いと免れてつねハ巴毗焉乃
邊の國と稱して湖に萬載したるもかそ後
大洪水より百年もよりあて奇観のありや
りうんもそ臺と築きあたり天長傲と
稱して氏として徒臺と別て各々自給の金器
諸ありお合して辨と稱すも終つてむ

其より役に倦てつねり各々そ臺と別て
に方り分敷すといり大洪水の年曆と考
ふ所ハ所謂當堯之時洪水横流すと別け付
たりノアツは曆毎全書に古大降諾厄と
りりこれありてアルケといひてちいなる標の
如くたりとを傳へてちいなるありて洪水を
免れしといつて右ハノアツか子セム亜細亞の
祖とたりヤヘットと歐羅巴の祖とあり亞弗利加
の地とセムが後ちうんといつてちいなる歐羅巴
にてち今の海也東をチ諾厄が後ありといり

巴毗鸞國今はシコロコヤ國といふ伯爾祭亞
國の傍にありあゝその邊にアラウトといふ
大なる山あり山に天守あり晴れあり諾凡が家
たりアルケケケに安きせりといふ處にて
右のつらなる嶺國あり其理ありまゝといふ海高
の事一づけ我長崎におきて唐和葉の事易
ければ皇國といふも後て和國通高をさし
りし孫といふは歐羅巴の服なりといふは通高
といふはもすす

但丁唐和蘭のりり篇末に詳し

ヤツハシを人はニッポンといふ日の基中といふが如し
即ちの歐羅巴におきてうの事なるを記せし法家乃
名初たる名譽の遊り者勿攔祭亞のマルキウスボーリ
ユスクリツハンキリといふあり海國をさしり
其は海國の地を稱して日本といふ群多の海
あり嶺あり海をさしり地中に入する海ありてこれ
ちの地を海して列しおしりびその形や五國たる
大波里太泥亜と喜百利尼亞とに似たり
大波里太泥亜は
暗厄里西國と
喜百利尼亞は
暗厄里西國と
恩可奔亞國との地ありは二國を一つとす喜百利尼亞
は列の地ありは大波里太泥亜國に属せり
東方隔は乃
境あり造化ありといふあり
暗厄里西國と

の海をみて一して殆ど死んでしまつた。取て
克べうとせむ新地たるをばせしむば故に南方の端
より海海する海狗園岸の中、多しこれ暴浪逆風
と死すの時にして、我徒の船形に用ひし日の僅
かにおしむりの時ありの、最下海面に接するに曲隈
浅水充滿せる新海をみて一して大船を並に不
信に一墨の佳港あり、稍著たあり船をも容るに
宜しとれと長崎の港とりよ、船もその口極めて窄小
にして、極くは近迫せり、航路の船師も海が浅水
の極み推しんとす、略記したるりのありとて又

逆風の先籠めりあり、けあり和文にうき港あり
とあり、す、假令これありんにも、人好生れを拒して
我等に去る事あり、人やは凡我も大洋と海、乃
災害先強列る臺灣琉球の邊に在りて、甚どしきの
船いは、逐一舉るに違ひす、古村波雨杜尾東の人
寛永の頃、回禁にあり、日本に通文せし、以、海海の御り
し、西留唐人をあり、日本に通文せし、以、海海の御り
浦野せむる、其時とはつひあり、二艘の船とて、其申
一、一艘あり、船を和名せしをりつて、船も有章の奉と
せしとく、これを海海と先籠とつる、相伴ひて、船れ
さす、さす、船あり、

歐羅巴洲勿擲祭亞國のマルキウスホリエスといひ
—の、後宇多院建治元年生年十八かして
本心とて、^{ダラカレ}難祖國に行てキエウライといふ
王に事して、^モ王は支那國を備するは時を
位て随して支那に行て、^ホ希塔十七年の名、稍き
用いられて、^モ後印度を経て、再び歸せり
といひ、^キキエウライを大元の世祖の名、^忽忽必烈
と史に記したる、^モその一、^是マルキウスホリエス
が活ありて、^歐歐羅巴の人初めて、^皇皇國を創り
といひ、^シシワハンキハその化繆のそあり、

各地の流産ありて、^云云はるに及ぶ、^モあり、^然然く
^有有るの域ありて、^其其の莫古の人数を容る事、^然然と
^理理なきと想ふ人あり、^其其の法は、^然然の如きは
^村村落、^城城郭、^連連綿して、^強強に、^割割るが如く、^併併に、^のの
一、^郷郷とわれは、^即即又、^其其れ一に、^入入る、^行行て、^都都里とて、^僅僅
^めめれ、^空空山、^唯唯一、^條條の、^街街市、^はは、^如如く、^以以て、^実実ハ、^前前
村の、^合合、^成成せり、^とと、^知知す、^れれ、^唯唯、^古古、^村村ありしを
り、^今今、^はは、^合合して、^たたれ、^もも、^舊舊、^をを、^以以りて、^其其、^名名を
^ままに、^すす、^河河、^をを、^其其の、^地地、^域域、^をを、^多多し、^其其、^最最、^大大、^のの、^所所、^をを、^大大
^莊莊、^農農、^及及、^びび、^廣廣、^のの、^をを、^天天、^下下、^法法、^城城、^のの、^所所、^をを、^大大、^のの、^所所、^をを、

國の役者に付ヒテ魯西亞國ハルシヤを経て、伯爾奈亞ハルシヤ
國ハルシヤに到り、咬啗吧シヤガタラに到りて、まゝり元禄三年一
病シヤガタラを以て、邏羅國シヤムロを経て、我國に到り、其の
翌年、幕府にぬ、元禄は、醫師なり、天下の大名は
廣都の江戸より、ちひありののは、亞弗利加洲アフリカ
都トルコ兒格の地、死日多國の諛祿城カイロと、まゝり外
郭北亞里利加洲の墨土是哥城の、一日、忠路シヤムロの城十一重、其の
河うて、中、あは、殊と、りつて、造り、市に、生きたる
那、お、う、い、量、龍、あ、ん、ど、と、毫、あ、り、り、と、ニ、ク、キ
ハ、フ、レ、ル、と、云、く、く、人、の、紀、に、及、ん、た、り、こ、れ、天、下

才一乃大城とす、又莫卧爾國の其巴城モワールも、
廣大なりと、以て、天竺の祿祿と稱す、ついで、墨是
哥城は、周田拂郎斯國乃道法に、二十里と、コウラ
ン、フトル、ク、と、い、ふ、書、に、見、え、たり、我、二十、五、里、餘、り
あり、ま、り、の、城、往、古、は、湖、乃、墨、是、哥、國、王、の、城、郭
あり、と、歐、羅、巴、洲、乃、伊、斯、把、泥、亞、國、より、奪、ひ
とり、て、今、は、國、名、と、も、新、伊、斯、把、泥、亞、と、云、へ、り
其、外、も、支、那、國、の、北、京、城、中、城、下、と、も、い、へ、り、て
周、田、都、逸、國、乃、乃、道、法、に、て、二十、里、と、い、ふ、我、十
四、里、ハ、合、せ、り、人、數、百、萬、餘、り、り、て、又、ハ、博、學、軍

十二里とつり、十二里を我、巴里之合心とあり、
是等の外、歐羅巴乃大城を、意大利亞國の都城
羅媽拂郎察國の都、把理斯、詰厄里亞國王乃
都、ロシヤの之ヶ城に、くは好し、御あり、
羅媽城、周圍を、意大利亞國の、道法にて十二里
とつり、我、巴里七合あり、海は、巴里一合、勃
にあり、把理斯も、ロシヤも、ちち、概羅媽城乃
るいなり、右里教を、何れも、コウテントワルク
註に、巴り、ウエー子以下、法城乃中、突大
ちり、伯爾奇亞國の、イスパン、ちり、御も、其の、周圍

我、十里、巴合に、南り、海は、其を、圓形の、第に、すれば、
合、羅之、里之、合心と、つり、巴り、合、羅は、巴里と、
其、合心は、右の、新城、何れも、巴り、合心、に、及ぶ、其、合
事、何り、海、を、以て、觀れ、巴り、合心、の、あり、也、垂夫利
加洲の、馬羅可城、弗沙城、あんと、何れ、も、巴り、
大い、ちち、城を、修築、する、事、必ず、あり、御れば、我國の
京都、巴り、合心、を、以て、天下、各大城の、列は、何り、
し、ちち、元より、的、的の、備あり、但、ちち、巴り、合心、を、
國の、道法、を、巴り、合心、を、以て、修築、する、事、
巴り、合心、を、以て、修築、する、事、巴り、合心、を、以て、修築、する、事、

日本人に一筆の定数有り我これを名づけして
膽宗ありとやいそん英雄ありとやいそん傑出
爲に亦敗られ亦負ふは怨とほて執ふ
事ありとやいそんの時ありとやいそん精神
自う強きとやいそんと執しせずその生全を
強^ク綾^シやうとやいそん

校者の言に曰他者の羅旬語^{ロシヤ}とりつてけ倫と記せる
と業すに強きと自己の腸にありと見たり
是を一人通例にのれが腸をさう脱し自殺すを

^云一り檢夫爾^カ死後^カおそ^ク法篇^ニと作序^カとあ^リて全部^ト
^せら^れて^る人^々と^るが^ん辭^はて^て校者^とい^はれ^ると^いふ^は



その内礼の事取におりて考に候くはさうとも元
せり昔附その人名と勇宗の才一たらん事とあひ
事ゆめありその史記の載るあはさうして義経清盛
阿部仲磨^{野馬野聖自殺の説と以て}とやいそん
吾の人は大成功ありし強とすんそのはひれ日本
自讀す事おの古一の羅媽人^{二人古附の}カミユツチイスラホウ
及びホウワトイコリテス^{勇者あり}に終るが如くある
事と伝ふす^{古附あり}羅媽^の人^{歐羅巴の}内^外とあひ
稱すとて^傳ふ^るは^後來^我談^説とせし^一所^の古^附の^一地^と
すたうにおりて只くさうの薩摩の考あり

七人の若士が、英國に於て、別て和蘭人の所を以て、
毒有の傷とせしむる事あり、其事たおいて
かぬ。千七百二十年寛政の事あり、千七百二十一年
日本もいよいよ四方乃海路開けて、國人何れの地を以
て、法意に於て、色高し、多しありし、一島の日本乃
小紅交易乃あり、臺灣に於てあり、後おそそ臺灣乃
地支那人に於て、今にいよいよ支那乃所成たり、
その次を以て、和蘭人の地にして、南時を和蘭
乃毒あり、ヒートルモイフ、臺灣の刺史たりし
が、遠恨あり、その事あり、や、その事あり、その事あり、
その事あり、その事あり、その事あり、その事あり、

したり、日本人とは痛く願ひ、いよいよ、
日本人謂らく、おのが身はたのつらあは、
それと我君の和蘭にこそ、
君に對して、ちひ小紅を、
和蘭を、
檢夫爾自註曰、南方の民と云ふ、
波爾杜毛爾人を云ふ、和蘭人を云ふ、
譯者曰、ナンバニイは南蠻人なり、
波爾杜毛爾人を云ふ、和蘭人を云ふ、
紅毛人を云ふ、
ちひ小紅怒、
り、
我君承く、

吾乃者の血とりつてこの汚穢を洗滌せんにかの凶
賊が首とちまらんり又ち生のながき吾等南には其
徳意に満ちたの爵とめくやうくもれとおさん我々の
中にしきて七人ありはるるぬづし海路の危険ある
城郭の堅固ある侍衛の兵多めぬ故は防衛の
おすともめゆて我々懐怖の統制あるに堪へば
南蛮人なり我々は二つホレシシなり
檢夫爾自注曰日本人
りつて云へば天下の世典の人のしやあり。○
譯者曰檢夫爾なりとりつてしんるるめありは
頼りなきひもあつてつゆし洋容とほりてこれを
大膽の器なりしんるとの強要と用ひてましん

りのくまじく東軍と機変といはれてこれを
あり、海路の水くき悪く、臺灣にうつりて刺史に
濁し、^{スナチ}別一舟に舟を括ておとす、^{ドキ}たらまの機にして
白雲におのの舟にはいりぬ、衛士家族目前に刺史の
生捕ゆるとんもやりまじい、彼らの刀を括て威をおし
儀におく、敵討する、その所は廊下に刺史を殺すを
す、夕時、勢好い乃、其款あるに、おれ、是れ人し、移る彼を
退けて、刺史と助けん、と働さるるのいのりなり

和蒙人は日本人とはホ子セシといひ、又ヤハント
ルスともいひ、臺灣の語は海田見なり、と云、^{一王君}

といふ。また平家とついでに、檢夫雨ヶを乃
お返せり。交教まじりしは、つゝは正すに違ひら
ず。それとちきは能す。和業人、我々の流を
もつゝす。死にたれば、たむうのお返をり
無し。人人、得者を智めたまひ。

也。皆是、辱の爲に當りて、同様お返けて、未練に
悔で、これとちりて、皆て、悔みの怒恨の念、執とは、子孫
より、て、互ひり、悔をかして、両業のつと、滅し、教
滅すに、りす。んと、止す。も、氏かくの、めく、の、風俗の、
このは、勇、教、まじり、虧、ま、何、の、つゝ、は、皆て、日本、の、

國權長く、勵し、て、内訌に、あ、ま、あ、り、とは、平家源氏と
あ、業、と、別、て、ま、い、あ、り、その、事、の、日本、人、怨、と、あ、ら、ま、
難言後する。人、清、海、く、永、き、と、あ、ら、ま、つ、地、に、つ、ま、の、後、を
す、に、悔、ま、ま、の、痛、ま、い、に、勝、れ、源、氏、平、家、の、名、義、
と、全、く、根、を、折、り、り、ま、れ、は、僕、ら、に、教、人、の、ま、い、し、て、
流、れ、逃、る、地、を、求、め、て、あ、ん、こ、備後とつゝや、乃中、の、
行、め、り、れ、ぬ、ま、ふ、に、ま、ま、入、り、り、あ、ら、ま、つ、ま、子、孫、道、を、
に、つゝ、り、て、病、形、し、た、ま、り、り、洞、穴、に、住、居、た、ま、の、れ、
に、その、名、家、の、境、ま、ま、と、あ、ら、ま、つ、ま、ま、め、の、ま、い、ま、
失、せ、て、人、り、教、い、せ、す、却、る、得、る、の、教、い、に、ゆ、り

一と云ふ

右の語は肥後乃ふ家乃居をいふ事なり
似

日本の地自然に豊かにして今にいつても外穀の志
無きもの極めて鮮く希にを祀りて穀りれりかといふ
たすて穀ふ利ありてはなれり凡その勇猛を敵の俗
満るて他の命令を極く事ありては年をとり希
かく植木の汁をに申して大韃靼の今居り大軍
と奉て頼ふ日本の浦には亦あせたりとあり
と云ふ固よりこの地の産物ありてはなれり凡その勇猛を敵の俗
満るて他の命令を極く事ありては年をとり希
かく植木の汁をに申して大韃靼の今居り大軍
と奉て頼ふ日本の浦には亦あせたりとあり

檢夫爾自註曰
韃靼と云ふ

了西の門は事によりて後よりとらへるを説くもの。譯者曰羅媽の
代の所ありて厄勤察亞の代より厄勤察亞の代は其の後の難波あり
羅媽の羅媽の羅媽の代は其の後の難波ありてはなれり凡その勇猛を敵の俗
満るて他の命令を極く事ありては年をとり希
かく植木の汁をに申して大韃靼の今居り大軍
と奉て頼ふ日本の浦には亦あせたりとあり
と云ふ固よりこの地の産物ありてはなれり凡その勇猛を敵の俗
満るて他の命令を極く事ありては年をとり希
かく植木の汁をに申して大韃靼の今居り大軍
と奉て頼ふ日本の浦には亦あせたりとあり

九十九年 延暦 國をさす海軍の威力長かき日本

の軍士は況定勢力とアサに記張してつるが波等の
と振る減し希るめ何とありは日中の史に記して曰く
クハシノシ檢夫爾自注曰クハシノシと云つた日本史の考証の通り
暴風西の夜にありてその時多の舟檢夫爾自注曰と
ありて故の水軍と沈溺せしむる翌年に此の邊で
その由國と振るしむるなりと日本史の大なる田村磨が遊
攻りにしりて故軍のりしむる國を力と振るたりは
かれを前にし幸事の重むるなりは後には引退ぶるの
新しむるなり田村磨今も捷と振るるなり一人も生て
國に歸りてしりたり故軍のりしむるなりと云はるなり

吉信と云ふ人の傳記に云ふ所のたふちりりありて二廻
後宇多の二女に事たりし時二百年八十二年弘安四年再び
部の如くありしなりと云ふ。建親の君世祖たる時既し
支那と云ふ海にありしなりと云ふ。モトコ蒙古ののちて張を用
ひて日本國と滅しし。その既にありしなり。支那に無候
せんし。然るにこれありて歸るのちおに大和に十艘
軍士二十名を振けてきたりしなり。檢夫爾自注曰支那の記
御々に日本の浦にありしなり。風暴烈ありしなり。はらひて
この強大な故の軍にありしなり。軍士急く
お振るるなり。是れなり。日本史にありしなり。はらひて

これと應め、在りて乃童見書漢をそのふに也
字と雅へす勝れしう勇士海くきとの豪傑たりと
英雄たりとす、而乃自教と事とせし事乃遠方
義理義理の氣氣よりびま事、此のこにりり、是なる如術よりして
童子幼雅の附よりして、別を勇果及び生残の公のら
しものよあすりとのなり、長共集會する時を多くい
古人武功のそのと後すりととめて、才一と史冊の
記すりと海と流りて、委曲乃微よりにりり、此の
海、自自分分これが有り感慨するに堪へず、是唯に御の
此と移らん、今守名巻の嗜好に好め、酒をりて

すりりもあし、これよりて四乃格式にて、心の強さ
に火を燃す事、りりたるは、國家と響りするとの老翁ふ
乃ぶ、りりいは帝より法信に命し、屏時の部りり
去卒とりりす、時ありて、是より事、ゆり、此のあさ
此火を見れば、法人群、集して、此録せら、まらん事を欲
し、おの武勇と獲へて、おの陣所と知らんと欲
す、此意ありに堪へず、此意をいひに追ひ、こて、種、命
の身一きりん事を欲す、志の強き好し、す、威名と好む
乃、あさり、我國に勇むの想し、自り、好んで、先、始
實大の地にありん事を欲して、寧、古の意、想乃、心

によりて時おむいさるる身は利ありてちい小澤次
せねざら事とすすとの形めてその命を文人事と
重なり日本人と云ふ乃ち終るに合しぬすきく
物にさうりり多銃行り手と手とおまりり
物にさ陰と刀とを用ひりに別てその刀の銃利
ありり刀にして人物とありとあすに堪しり
三作と振の多とありりてこれと吾人に見る又ハ
四外に終るなりと標すも事既に久しこれと賣り
そのは確利たりこれと賣りり法入る死刑
しり

右ハ我國の武徳といへば。檢夫爾以朱院に百年
余に好りぬれば。我國の風俗その故に今もハ同
如のなり。如人。宝嶋粟の海を難治に由るなり
評りり。

日本人より勳一筋一歩より張羅に寄る。解少と
ゆて是れとす。張るきりのは。法系法根。飛龍螺
蚌おらび海州のちいとりて。生と養へる。福身改是
に。いへ。歩行す。水とありりて。常法食とす。観夜と
す。事あり。改とた。は。某の。長枕の。平向に
爲て。長枕の代りに。本は。水。海。は。海夜。海。

痛くもみかくしてゆくや張羅に堪ふたをゆく
あつて人ちのふれ義作法と收んでまゝの句を
扱めて清潔にしよめて衣服と純粋ふし、家屋と
精潔あす

狭しきりのあればとて本とのまじりあはれず
又襦袢とちよさうそのはりにゆきあはれず
ゆ波方には比較してまじりあはれず

日本人とは情婦なる支那人の境よりと想つ人は
実にしよちよさうと楽しむるはわづらふ事と
なるとの百にゆくはちよさうと人あひはなす

水鏡すくもりゆく日中を嶮岨多石の地ふ
しよ山峯高山の周環多し若し梅群の用心

勤山をとりつてせよまは多しとられ険凶のふれ
ゆりんとせりあはれとまのゆにまては造化ゆき
に務すに勝れて寛良の徳と以てせりまは土地
の務ゆき耕種の務ゆきは務すあはれ人のゆき
号し能く勤りのゆきちよさうとまの富貴と
起すゆきのゆきまはあまを肥培ゆきと地方の
かゆにゆきのゆきまはあまを肥培ゆきと地方の
たつゆきのゆきまはあまを肥培ゆきと地方の

努力す農夫のこれが爲に終るといふ乃辛勞用公
及びその勤苦と報賞せすといふの好し御のこのす
凶波至極の地殆どが洋の耕種と容れに堪へざる
ゆゑ、全く不用となりとせずその氏前多にして
且海、漸暗とあつじまわくの如しその上はく狭小
なり、四界のうちにはおめて、若くは海、若くは陸乃
新生、新多の産物とつてその用を盡し、唯お生令
と得つたお新しはりす、後、打、既、婚、に、備、へ、う、し、ひ、の
新、多、と、お、れ、り、あ、れ、か、食、札、の、と、と、思、ふ、に、免、ま、角、擧、の
個、別、し、て、諸、物、殆、ど、皆、一、す、と、り、あ、る、の、あ、り、地、俗、

とけて、あつじとら乃との、波、お、ま、て、多、く、は、大、小
其、胎、の、お、と、ち、ま、り、その、林、中、山、中、海、中、葦、中、に
能、根、法、を、を、産、し、て、後、著、の、お、お、り、用、し、る、は
食、札、と、崎、の、お、り、海、は、有、情、の、法、也、蝦、蟹、螺、蚌、
鶺鴒、お、り、法、海、草、の、お、り、と、も、し、て、ま、り、個、別、す、
お、り、し、じ、真、中、お、り、は、毒、の、り、の、と、お、り、お、り、お、り、お、り、
り、判、し、て、その、毒、と、ち、れ、造、化、の、俗、に、お、り、す、り、に、お、り、お、り、
と、り、お、り、す、り、に、お、り、す、り、し、て、お、り、お、り、と、り、一、励、勤、
す、り、に、お、り、し、て、親、敬、お、り、お、り、す、り、に、お、り、
お、り、し、ひ、り、の、お、り、と、り、地、俗、曉、に、し、て、耕、種、す、り、に

野——硫黄と出すとの地やぐの地を穿てられし
肥市に一種の白堊ありて、磁器と製すは依
才ハラサアヤと云ふ物多し、硝子と云ふ物多し、硝子は、硝子
牛と云ふ、奥州薩摩馬と云ふすか、久米穀を焼
たり、煎餅に粟多し、長後は柿柿は、京法にヘイケト
希のおとろし、ちれども、おろしの味噌多し、徳波は
海菜螺蚌と生す、牛車鞍——その他は、銀——
ニシヤマ西山の山の海濱、おろしの海濱の産物
多し、凡、全国の海濱、種々の魚、鯛いと生す、凡
焼多し、凡、全国の海濱、種々の魚、鯛いと生す、凡

中、法教法宗の教、法宗に生す、凡
その、及びその地、種々の器、械衣服と、凡の
は、毎、年す、凡、連、年す、長村の海濱に、凡
龍波、琉球の浦、薩摩の國、おろしの國に、凡
水晶、老石の石、凡、地産に、凡、其の國、中、凡
谷、凡、其の地、多、凡、其の國、法宗に、凡
河、種々の産、物と、凡、其の國、法宗に、凡
和國に、凡、其の國、法宗に、凡、其の國
綿と、凡、其の國、法宗に、凡、其の國
力勤に、凡、其の國、法宗に、凡、其の國

すめと得たりと知る人、殊妙精巧他の俗に就ては、
殊に金銀粧輪及び銅に於て腕れり。満く
其職は、鉄何れも用巧、形殊の術と得たり。其は
その武具乃奇、素好良ありて、何れぬべし。法像
法相の彫刻、何れも赤銅と金とにす。其巧妙
敏速きより、其方法、固形及び、その何れある、赤銅
とり、其は、ここの何れ、金なり。その氣、思に、ちりり、と、まき
りのあり、銅に、其金、あり、と、まき、と、まき、と、まき、と、まき、
凡そ、を、以て、何れ、と、彫、物、を、始、の、工、師、の、手、より、出、たり、
時の、あり、は、金、と、其、金、の、如、し。其、氣、の、思、の、あり、と、まき、

其金に、おと、と、其、事、に、庶、哉、満、く、結、を、織、り、の、精、あり、
滑、き、り、支、那、人、と、し、の、操、す、り、の、能、く、す、朝、廷、に、
其、臣、事、に、任、せ、られて、一、室、の、爲、に、給、う、れ、て、地、事、を、管、
たり、す。其、能、き、事、の、巧、り、と、あり、と、何、日、と、れ、り、其、精、敏、
と、應、す、り、其、の、多、く、織、結、を、織、り、と、以て、其、事、を、満、く、
其、酒、を、サツキ、と、名、づく、梁、酒、と、り、つて、醸、す。支、那、り、
は、ち、の、酒、味、に、し、て、物、れ、り。酒、の、業、は、其、に、て、其、
酒、を、り、支、那、人、に、織、り、り、其、地、に、其、昔、の、酒、を、用、
て、其、酒、を、其、酒、の、味、を、以て、其、酒、を、其、酒、を、其、酒、を、
竹、酒、は、綿、と、り、つて、す。其、酒、の、味、は、其、酒、に、し、て

多白歐羅巴人の織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と

又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と

昔紙をりつて人家修飾の漆器と
又くその織をりつて人家修飾の漆器と

漸に海一凡他俗はつちさるるして、サクリモトンス探索進
達一、カウ象教書之微妙の光輝おとび、カウ漢語地傳を以て
そ多を註者すつちと好む事は、**我歐羅巴**に一一は
つちす、カウ是、カウ舌とあり、カウ舌と伝するは、カウ明乃女公
の助けにありのちや、カウ海にその人、カウ探索刑とありて、カウ探す
らく、カウ祖之の教法と異て、カウの西語天を比し、カウ人とのあり、カウ麻生
洪夜の爲に、カウ聖死の辱を、カウ法よりとあり、カウ新に、カウ奇怪の
教法とあり、カウと探す、カウは、カウ百年中、カウは、カウぬ、カウ吉利支丹
の教法、カウ未だ、カウ地は、カウま、カウて、カウ金、カウ聖、カウなり、カウし、カウが、カウ歳、カウ終、カウの、カウ感、カウ之、カウ
是、カウが、カウ爲、カウに、カウ殉、カウ死、カウせ、カウり、カウの、カウそ、カウ數、カウと、カウあり、カウす、カウ是、カウ別、カウの、カウま、カウさ、カウと、カウ

於、カウ公、カウ會、カウ極、カウあり、カウ一、カウ法、カウ作、カウる、カウが、カウ過、カウある、カウ起、カウ事、カウする、カウる、カウ我、
思、カウの、カウに、カウり、カウ一、カウか、カウの、カウ邪、カウ惡、カウ氏、カウを、カウる、カウが、カウその、カウ本、カウを、カウわ、カウけ、カウる、カウ一、カウ固、カウら
ぬ、カウと、カウ執、カウと、カウせ、カウす、カウ自、カウ己、カウの、カウ用、カウを、カウ記、カウ模、カウの、カウた、カウる、カウと、カウせ、カウる、カウに、カウ使、カウせ、カウす、カウして、
動、カウた、カウる、カウせ、カウは、カウ死、カウと、カウ吉、カウ利、カウ支、カウ丹、カウの、カウ信、カウを、カウ公、カウに、カウ色、カウ一、カウと、カウつ、カウあ、カウら、カウれ、カウ
カウわ、カウら、カウり、カウそ、カウ動、カウ言、カウの、カウ報、カウ費、カウと、カウも、カウゆ、カウら、カウに、カウ動、カウく、カウ海、カウ一、カウと、カウ終、カウ終、カウに、
が、カウ一、カウく、カウ自、カウ治、カウす、カウる、カウ如、カウ何、カウれ、カウい、カウま、カウ一、カウ年、カウの、カウま、カウい、カウと、カウ使、カウひ、カウの、カウ信、カウを、カウ公、カウ
に、カウ傳、カウへ、カウす、カウ風、カウ俗、カウ變、カウ化、カウの、カウ成、カウ功、カウの、カウ建、カウつ、カウあり、カウん、カウと、カウ合、カウり、カウて、カウあ、カウら、カウく、
他、カウの、カウと、カウ難、カウへ、カウて、カウそ、カウの、カウに、カウ後、カウ來、カウせ、カウ一、カウの、カウら、カウれ、カウた、カウ極、カウ意、カウに、カウは、カウす、カウれ、カウ
天、カウ地、カウ懸、カウ隔、カウの、カウ果、カウり、カウる、カウと、カウい、カウに、カウ勉、カウめ、カウら、カウう、カウ終、カウは、カウわ、カウづ、カウら、カウに、カウ似、カウく、
成、カウら、カウる、カウあ、カウり、カウと、カウい、カウら、カウる、カウに、カウ自、カウら、カウる、カウそ、カウの、カウ爲、カウを、カウ拓、カウき、カウ出、カウて、

ちいれも、漢汁のむきをきひりり、凡そ、佛家、佛の佛、佛の佛、
を、佛家の法は、おのて、言あり、たにせ、れ、れ、乃、教法
と、い、佛、佛、又、い、矣、教、所、説、法、也、と、容、ろ、ろ、と、い、佛、佛、と
佛、の、の、本より、日本人とは、佛、教、の、の、の、の、の、の、の、の、
子、國、許、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
奉、事、す、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
を、と、勉、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
や、れ、も、吉利支丹等、及、お、如、に、の、の、の、の、の、の、の、の、
を、と、用、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
未、來、の、福、と、言、ふ、言、又、教、と、言、ふ、に、又、の、の、の、の、の、の、
又、日、本

医、術、の、の、は、外科より、は、内科に、巧、く、も、外科又、歐羅巴
の、術、も、用、の、物、れ、も、医者と、法術、と、傳、す、ろ、の、多、端、の、
す、外科す、ろ、に、火、と、鍼と、の、二、つ、け、二、つ、の、の、の、は、功、力、を、
ち、い、め、り、と、す、病根、と、滯塞、と、名、の、け、滯塞、と、痛と、を、
と、の、と、風と、名、づ、く、二、つ、の、の、の、の、病根、と、風と、同と、
て、も、平撫、と、脱出、す、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
日、の、の、湯浴、は、純粋、を、作の、の、の、の、且は、天性の、清淨、と、
ぬ、め、る、に、似、せ、し、ち、い、か、ら、ね、と、白濁、す、物、も、又、とを、以て、壯健、
と、傳、つ、て、土人、の、免れ、強き、此の、許多、疾病、を、除く、も、功、力、
も、ち、い、い、日治、の、の、の、の、地に、長良、の、過急、行く、緩慢、

の類い多きものと成す商賈の書に官史に由す備後を官史と云ふ
そのものと冠不あむしてあ意の之とすれ法規と比ゆせ
られま由の計較せられ時日と知らるすして安政にはら
ゆん大歴はらうは畏れのいれあれを波地あて
は小歴とくとも既に煥之由せし此を大歴
是と改むは事能さるかなり其のかき或は
の昔法格外の事にあてらる過失りらるを充たれ
とつとう唐とハついわるあるんと我らを新てるん
大概是等の法是と歐羅巴の或は建後にして
費用多くあする多くくくちいお困倦するに

はすれどの格とあするあき意になてられもある
歐羅巴の如き概すれど事の歴不るる所するは浪り
しかれに歌所の多き延引のきめを改書の虞とある
其他百雨の奸習と周内の事一人誰々をくらん
けい奸黨のあるをけい物はる延緩めるは法範品の脚
友のあるあり奸黨又その格とあるになりは法範品の脚
退き去るにつくると又大歴の石は意して引れぬらば
即又に何の好むけありくうて垂びとまとある後
意新法新法に比しせらるる範品のを互同のをゆび
法費沿て増長する而借得をと避て却る陰整に
端々然るいふては物々とくくも日々人に令く刑

法のしほ思ふくは、
是又其をさるるの繁密にして、遠く事あるに犯して
と心されざるを刑とせられたるは、
よくあつた順に最悪の地として、
刑と維持せしめて、
常の事とす。海の内幕幕にして、
若らざるの、
ゆんね右の刑法の、
何れも、
法を改ま

と、
中におおむ

歐羅巴は、
有り、
同より見て、
とも思ひ、
あり、
将々、
法、
地書に考へて

時更新報 明治十九年六月
 日本種 帝國大學
 来を知る 北海道
 変を必要 北海道
 ハ元と 北海道
 ハ野作 北海道
 論の要 北海道
 乃方必 北海道
 勢を左 北海道
 言葉の 北海道
 と思は 北海道
 洋諸島 北海道
 聊る日 北海道

明治十九年六月廿三日 宇



新日本人



